地域振興は人づくりから――地方に根ざし、世界にはばたく新潟県立大学

UNP University of Niigata Prefecture

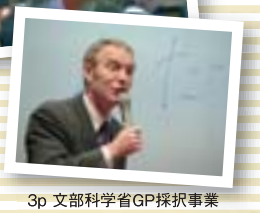
2010.6
No.3
新潟県立大学ニュース

米国ベセル大学 海外研修

2p 学長室から

6p 学部学科のニュース

4･5p 海外研修特集



3p 文部科学省GP採択事業

4･5p 海外研修特集

3p SALC（セルフ･アクセス･ラーニング･センター）

Contents

学長室から　2
文部科学省GP採択事業　3
海外研修特集･センター紹介　4・5
学部学科のニュース　6
教員の横顔　7
入試関連情報　8

大学概要

■新潟県立大学の基本理念

○国際性の涵養
東アジアをはじめとする世界の人々との社会的･文化的交流を促進し、グローバルな視点からの教育研究を進めます。

○地域性の重視
郷土の自然･文化への理解をもって地域づくりや地域の共生を担う人材を育成し、地域社会に開かれた大学を目指します。

○人間性の涵養
豊かな人間性を培うために、学生一人ひとりに対してきめ細やかな教育を行い、学生同士が切磋琢磨し学び合う環境をつくります。

■学部･学科構成

国際地域学部	国際地域学科	入学定員160名
人間生活学部	子ども学科	入学定員　40名
	健康栄養学科	入学定員　40名

学長室から

FROM THE PRESIDENT

開学2年目をむかえて

新潟県立大学 学長
猪口　孝

本学は開学2年目をむかえました。大学を取り巻く状況が厳しい中での開学ですが、そうした状況下においては、学生の選択眼は厳しくなり、競争も一層激しくなるため、大学もそれだけの工夫をしなければ良い学生を引き寄せることができません。

本学では、例えば、文部科学省が公募した「大学教育・学生支援事業」の「大学教育推進プログラム」に、「環日本海圏新潟発の多文化リテラシー教育」が採択され、様々な特別講義や事業を実施したり、1年次からのインターンシップ制度を実施するなど、逆境をむしろチャンスととらえ、教職員が一丸となって努力を重ねてまいりました。

こうした努力の成果は、昨年度10倍であった志願者倍率が、今年度は11倍とより高くなったことからも明らかです。この志願者倍率の増加というのは、経済が停滞している状況の中で「自分を生かせる大学を」という学生たちの強い思いであり、県内外の本学に寄せる期待の高さであると実感しておりますが、今後もこの期待に応えるべく一層の努力を続ける覚悟でおります。

そして、本学の目標である、国際的な視野を持って地域の課題に取り組むことができる人材の育成により、地域振興にも結び付けばと願っています。小さくても「やっぱり県立大学は違うね」と言われるようにしっかり教育したいと思っています。

こうした「人」を作る大学として、まだ改善の余地があることは事実ですので、学生や教員の声を聞きながら、さらなる向上に努めていきたいと考えております。皆様からの一層のご支援、ご協力をお願いいたします。

TOPIC 1

第2回新潟県立大学入学式挙行

2010年4月7日に新潟県立大学第2回入学式および県立新潟女子短期大学専攻科第16回入学式を挙行しました。ご来賓、ご家族のご列席のもと、新潟県立大学国際地域学部168名、人間生活学部81名、県立新潟女子短期大学専攻科10名を新たに迎え入れました。

入学生の皆さんは、これから始まる学生生活への不安もあると思いますが、夢や希望の実現に向けて邁進することを期待しています。

TOPIC 2

アジア・バロメーター シンポジウム

2010年5月14日に「アジア・バロメーター」シンポジウムを都内の日本記者クラブで開催しました。7名の討論者のほか、企業関係者や研究者ら約40名が参加し、「アジア・バロメーター」の意義や今後の課題について議論しました。意識の変化を見るために長く調査を続けてほしいという意見や、知名度のさらなる向上と世界に向けての積極的な発信を求めるといった意見があり、活発な討論が行われました。(「アジア・バロメーター」は、一般市民の価値感や満足度、政治に関する意識などを対象としたアジア最大の比較世論調査です。)

TOPIC 3

(写真左より福嶋国際地域学部長、山村氏、猪口学長)

多文化リテラシー特別講義

昨年度、文部科学省のGPに採択された「環日本海圏新潟発の多文化リテラシー教育」の取組の一環として、「多文化リテラシー特別講義」を2010年6月1日に開催しました。今回のゲストスピーカーはSusan B. Hanley、山村耕造御夫妻でした。

Hanley氏(ワシントン大学名誉教授(日本史))は「放浪記:Challenges and Rewards of Living Abroad」と題して、御自身の日本留学の経験などをもとに外国・異文化の中で生活することの意義を講義されました。

山村氏(元ワシントン大学教授・経済小説家)は、「Meeting the Challenges of Globalization: Live without Borders Like A Dandelion(グローバル化に挑む:国境なきタンポポ人生の勧め)」と題し、若者には、世界及び日本が直面する様々な難しい問題に、敢えて危険を冒しながら勇敢に立ち向かっていってほしい、大きな夢を持って世界に雄飛していってほしいと訴えかけました。

今回の特別講義は、いずれも聴講した学生にとって意義深い講義であったと思います。

GP採択事業

LEARNING

文部科学省ＧＰ採択事業
「環日本海圏新潟発の多文化リテラシー教育」

新潟県立大学は、語学力やグローバルな視野でものを考える能力など、「国際性」を持った若者を育成することを基本理念の一つとしています。この理念のもとで進められている様々な教育活動の中に、正規カリキュラムを発展進化させた「環日本海圏新潟発の多文化リテラシー教育」（※1）という取組があります。

この取組は平成21年度、文部科学省の「大学改革推進プログラム〈GP（※2）〉」に選ばれました。平成21年度から23年度まで文部科学省の財政支援を得て様々な事業を展開していきます。

●具体的な事業の例

◆学外講師による「多文化リテラシー特別講義」

◆SALC（Self Access Learning Center）の英語教材（Paperback、英語版人気漫画、CD等々）の拡充やPC、DVDプレイヤーの増設による、自学自習環境の大幅な改善ワークショップ等の実施

◆米国ベセル大学での海外研修「多文化リテラシー特別講座」

※1「多文化リテラシー」･･･　多文化･異文化に関する知識の理解
※2「GP」･･･ 全国の大学等が行う教育改革の中で「優れた取組」（Good Practice）として、文部科学省が支援している教育活動

SALC Writing ワークショップ風景

取組の2年目となる22年度は、多くのネイティブスピーカーが参加する英語による異文化交流機会 UNP Communication Forumや、ロシア、中国及び韓国の言語、歴史、文化について、県内在住の留学生などと交流をしながら学ぶワークショップなど、学生の参加を重視した事業が加わります。また、学生が将来の目標を持って、意欲的に学習に取り組むのを手助けするため、本学の学生が思い描くような目標を実社会で達成しキャリアを積み重ねている方々をお招きして「ロールモデルレクチャー」を行います。ほかにも、英語のSpeaking クラスの少人数化や国内での国際就業体験研修などを実施し、実践的英語能力のアップや多文化リテラシーの深化などの教育効果をさらに高めていきます。

多文化リテラシー特別講義
講師:米国ベセル大学
リーズナー教授

第6回

演題:「Self and Other:Multicultural Literacy」異なる文化の違いを大切にしながらも、異文化間にある共通する特徴を見つけていくことで、異文化理解と自文化の再発見がもたらされるというお話でした。

多文化リテラシー特別講義
講師:ダニエル･カール氏

第7回

演題:「国際交流入門!」日本でのユニークな異文化体験をもとに、コミュニケーション上の問題を分かりやすくユーモアたっぷりに解説していただきました。

かわら版

本学では昨年度から、教員による新潟学をテーマとした連続公開講座を実施しています。
平成22年度は、『とっておきの新潟学～新潟県の保健医療』を開催いたします。

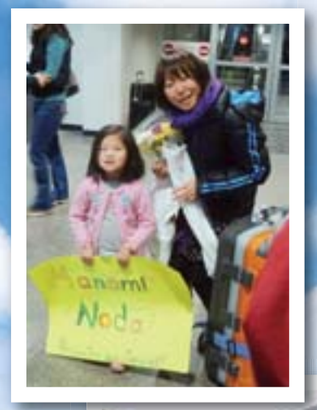
平成22年度 新潟県立大学 公開講座

「とっておきの新潟学 ～新潟県の保健医療」

	Ⅰ 本学会場	Ⅱ 長岡会場
日時	平成22年7月31日(土) 13:30～16:30 新潟県立大学	平成22年8月21日(土) 13:30～16:30 新潟県立歴史博物館

プログラム
1. 学童の不定愁訴と生活習慣
2. 小児科領域の医療の現状ー感染症予防ー
3. 成人の糖尿病治療における現状と課題ー新潟県への発信ー

連絡先
新潟県立大学
総務部 経営企画課
電 話 025-368-8224
FAX 025-270-5173
mail：unpreco@unii.ac.jp



ベセル大学

特集 海外研修

2010年2月20日から3月17日までの3週間半の間、全学共通科目である「海外英語研修B（中期）」を受講した本学学生20名が、米国ミネソタ州セントポール市にあるベセル大学での研修に参加しました。全員がホームステイを行い、英語の授業のほかに、現地大学生との交流、小学校や老人ホームなどの施設訪問、ホストファミリーとの交流会を体験しました。

思い出のセントポール

（一番左が松木君）

国際地域学部
国際地域学科2年
松木史和

私は県大に入るまで、ずっと英語を話すことが苦手でした。なんとか英語になじみたいと思って、1年生から米国ミネソタ州セントポールの研修に参加しました。アメリカへ行く前にホストファミリーとメール交換をしているときから海外にいる気持ちでした。空港に降りた瞬間は、出迎えてくれた家族の姿を見て「これは大変なことになった」と慌てたことを今でも覚えています。きれいにデコレートされた出迎えプラカードに自分の名前があり、家族と抱擁した時から、ものすごい早さで3週間半が経過していきました。研修では午前は大学で講義が行われ、午後は社会・文化体験として様々な場所を訪れます。小学校、老人ホーム、そして上院議員に質問した州の議事堂、歴史博物館。特に巨大地震で被災したハイチの子どもを含め、世界の飢えに苦しむ子どもを救済する「Feed My Starving Children」での活動は一番楽しい思い出でした。週末には真冬のキャンプもあり、日々の活動は家族との楽しい話題となりました。今はもう一度ミネソタへ戻るため、勉学とお金を貯めるためのアルバイトに精を出しています。

（右から3番目が酒井さん）

人間生活学部
子ども学科2年
酒井なつき

研修で一番印象に残ったことは、adoption（養子縁組）です。講義でアメリカの養子制度について学んだとき、言葉で表せない感情におそわれました。なぜ日本とはこんなに違うのかという思いもあり、思わず涙が出てしまいました。私のホストファミリーにもadoptionの子どもがいて、その子どもについて家族から話を聞くと、「彼を自分たちが産んだ子どもと同じように愛している」と話してくれました。その反面、家族は彼の生まれたグアテマラの文化も大切にしていました。私はこのような養子制度が、日本で受け入れられるだろうかと考えてしまいました。養子になる子どもは親のいない子どもや貧しい家庭の子どもたちです。私はそのような子どもたちに何ができるのかと深く考え、日本に戻ってから勉強したいと思うようになりました。もしこの研修に参加していなかったら、私はアメリカの養子制度について知る機会はなかったし、深く考えることもなかったと思います。だからこの研修は私にとって、自分の将来を考え直すひとつのきっかけになりました。ホストファミリーやアメリカで学んだことを決して忘れることなく、これからも学校生活を送っていこうと思います。

センター紹介　INTRODUCTION TO THE CENTER

国際交流センター

センター長 若月　章
（国際地域学部 国際地域学科教授）

新潟県立大学が2009年4月に開学いたしました。本学の3つの基本理念の一つに「国際性の涵養」が掲げられており、その理念実現の一翼を担う学内組織として、国際交流センターが開設されました。

センターは、本学の学生の海外留学（短期研修を含む）の推進、外国人留学生の受入れ、海外大学等との交流の促進、学生の語学学習支援等を通じて本学の教育研究活動の推進に貢献することを目的としています。

センターの主な活動としては、①留学相談、②外国人留学生の生活支援、③海外留学協定校の拡充、④海外研修、⑤SALC（セルフ・アクセス・ラーニング・センター）運営等があります。

昨年度の主な取組としては、韓国の慶北外国語大学との交流協定締結、SALCにおける英語メンター（アドバイザー）による学生の語学学習の支援、国連軍縮会議や国連大学グローバルセミナーへの学生の参加支援、春休みの米国ベセル大学での英語研修などが挙げられます。また、国際地域学部が、文部科学省に申請し採択されたGP「環日本海圏新潟発の多文化リテラシー教育」の実施機関としての役割も果たしました。

今年度は、昨年度の英語研修、SALCの運営及びGPの推進などの取組に加え、ロシア語、中国語、韓国語の地域実地研修、外国人留学生受入に関する調査、学外向けの講演会、国際機関での就業体験研修などに取り組みます。

最近の学生は、新しい挑戦をしたがらない、海外に出たがらないなどとしばしば言われますが、本学の学生には当てはまらないでしょう。本学ではこれからもグローバルな視野をもって、国際的な課題に取り組める人材の育成を目指します。国際交流センターとしても業務内容を更に充実させ、「国際性の涵養」という理念の実現に大きな役割を果たして行きたいと考えております。

学部学科のニュース

NEWS FROM THE FACULTY

国際地域学部 国際地域学科

私たちが暮らす地域でもグローバル化の波を受け、身近な課題を解決するためにも国際的な視点や国際情勢の理解が不可欠になってきています。国際地域学科では「多文化リテラシー（多文化・異文化に関する知識の理解）」をもって地域の課題に取り組む人材を育むため、高い専門性と豊かな国際経験をもった教員を配置しています。今年度新たに開発経済学・国際協力論・行政学・アメリカ史を専門とする4人の専任教員とロシア・中国・韓国の提携大学から3人の客員教員が着任し、教員総数は48名（うち外国人教員は8か国12名）となりました。

学生は、1・2年次の学部共通科目で国際地域学の基礎を学びますが、2年次から4コースに分かれて専門分野の学習を始めます。今春2年生になった1期生のコース別登録人数は国際社会37人、比較文化57人、東アジア50人、地域環境19人です。

次に本学科の一番の特色である語学プログラムをご紹介します。昨年開講したACE（Academic Communicative English）プログラムでは、1年次から少人数のCore English、Writing、Speakingクラスを履修します。Lectureクラスでは英語による5分程度の講義を聞いてノートをとる練習から始め最終的には90分の講義にも対応できるように、習熟度別クラスで学習します。東アジアの諸言語についても、外国語大学にもひけをとらないカリキュラムで2年生向けに開講しました。またキャンパス内で英語を使って異文化交流を行う「UNP Communication Forum」を今年から計画しています。海外英語研修は今年から派遣先が増え、露中韓の研修も始まります。外国語学習を支援するSALCでは英語メンター（アドバイザー）が増員され多数の教材が備わって、学生たちの利用で活気にあふれています。これらの多くは文部科学省に採択されたGPの取組（3p）として導入されました。新潟県内外から集まった学生たちが切磋琢磨する環境を目指し、取組を推進していきます。

人間生活学部 子ども学科

新潟市の委託研究を活かした人材育成

少子化対策はわが国の重要課題の一つですが、新潟市では合計特殊出生率が全国平均を下回っており、子育て支援に関する市民満足度も低い状況です。そうしたことから、新潟市が県立新潟女子短期大学に委託し、新潟県立大学開学後は子ども学科の教員が引き継いで行ってきた少子化対策推進研究がまとまり、最終報告書を市に提出しました。

社会の急激な変化のなかで、子育てに困難を感じる親が増え、安心して子どもを産み育てられる環境を社会全体でつくり出していくことが求められています。そうしたなかで幼稚園教諭や保育士も、子どもを保育するだけではなく、子育て支援の専門家としてその役割を果たしていくことが必要となっています。

子ども学科のカリキュラムは、幼稚園教諭や保育士を目指す学生が子育て支援について体系的に学べるように科目が設置されています。また、福祉について関心のある学生のために社会福祉関連科目も設置し、幼稚園教諭一種免許状や保育士資格とともに、社会福祉士の受験資格を取得できます。

新潟市から委託された研究の成果をこれらの科目に反映していきたいと考えています。そして、子ども学科では、子育て支援についての高度な知識・技術を身につけ、幼稚園や保育所などの現場で中核として活躍できる保育者の養成を目指すとともに、地域において子どもの幸せと福祉に貢献できる人材の養成に努めます。

人間生活学部 健康栄養学科

近年、食生活を中心に健康づくりを支援する「管理栄養士」への期待が高まっています。

管理栄養士は、医療（病院等）・福祉（老人ホーム、特別支援施設等）・学校（小・中・高等学校、給食センター）・保健（保健所等）などの幅広い分野において、栄養・給食関連サービスのマネジメントを行うだけでなく、傷病者に対する疾病の治癒・回復・予防のための食事指導や栄養教育、一般市民に向けた健康保持・増進を目的とする栄養教育を行っています。さらに、管理栄養士は地域の食品産業において、商品開発や食品の栄養表示・品質管理などに対応できる重要な人材として期待されています。また、学校や地域において食育推進活動の中核を担う人材として、2005年度に「栄養教諭」の資格が誕生しました。

健康栄養学科では、健康づくりを支援する専門家である管理栄養士と栄養教諭を養成します。少子高齢化社会の到来に備えて、地域住民の「健康寿命」を延ばすことを目指し、総合的な食育活動の中核を担う人材の育成に努めます。

今年4月より鴨井久司（かもいきゅうじ）教授が着任しました。長岡赤十字病院で30年間、内分泌代謝・糖尿病専門医として勤務し、現在も現役の内科医師です。新潟県内でも糖尿病は年々増加傾向にあり、若い年齢での発症も増えてきています。予防および治療の原点は『食』であり、地域での予防の場と病院での治療の場で活躍する管理栄養士が今後ますます必要になります。

これで病態栄養専門師の金胎芳子（こんたいよしこ）准教授、小児科専門医の佐々木亜里美（ささきあさみ）准教授と医療の専門家がそろいました。人間の体・病気、病気の予防・治療に必要な栄養の知識、医療の現状を学べる体制が整いました。

教員の横顔

A PROFILE OF PROFESSORS

国際地域学部　国際地域学科
助　教　荒木和華子
WAKAKO ARAKI

本年4月に着任し、アメリカ史・比較文化・英語科目を担当します。専門はアメリカ合衆国の歴史（人種、ジェンダー、教育）です。研究対象は、19世紀の奴隷解放時につくられた元奴隷の学校です。米国内の史上最大の差別構造である奴隷制度を廃止する過程において、また解放黒人が自らの自由を実現する手段として、教育の果たした役割を考察しています。外国史を勉強するメリットは、当該国に関する知識の取得のみならず、時空間という縦横の軸を鏡として逆照射することにより、各人が自らの置かれた時代、社会、立場、視点をより批判的に検証できるようになることだと思います。いつの時代どの地域においても教育は本来、人々が命を懸命に育む手助けのための最善策を提示する役割を担ってきたといえるでしょう。UNPという現場で、私自身もこの試みに携わることを幸せに思っています。学生と教員、大学と地域などの垣根を越え、ともに豊かな人間形成をめざして学び合いましょう。

国際地域学部　国際地域学科
准教授　渡邉松男
MATSUO WATANABE

「ドクター・ワタナベ、トヨタの工場を我が国に誘致できないか？」首相アドバイザーとして日本政府からボスニア・ヘルツェゴビナに派遣された５年前、こんな相談をされたものだ。内戦終結後10年、世界の注目も他へ移り援助も減りつつある。分裂した国の統合も進まない。とんでもなく安い中国産の靴や服には、国内の工場はとても太刀打ちできない。失業率は高く、大卒の若者も職にありつけない。サラエボのオーストリア大使館にはビザ申請の長い列が途切れない。こんな国に見切りを付けて国外脱出したい気も分からないではない。だからこそ外国からの投資で雇用を作り、経済を活性化したい首相の気持ちは痛いほど分かる。しかし、だ。「いいですか、車の部品数はどれだけかご存知ですか？３～４万点ですよ、今のこの国の能力でできますか？それにこんなひどい道路の状態で、どうやって欧州市場に運ぶんですか？」さて、日本はこのバルカン半島の国に何をすべきか、何ができるか、そしてあなたがボスニア首相なら、どうしますか？

人間生活学部　子ども学科
講　師　小澤　薫
KAORU OZAWA

「先生の授業は子どもに関係しているの？」と聞かれることがあります。講義では、給料明細を見ながら働くことや、働くことができない時にどんなしくみが暮らしを支えているかを考えています。直接「子ども」とは関係がないように見えても、子どもを取り巻く大人、地域、社会について考えることが「子ども」を思うことにつながっています。最近は「子どもの貧困」が注目されるようになり、子どもに着目した支援を連携し主体的に行う流れが強まっています。子どもを支えることは、その子どもの日々の生活に思いを張り巡らせることです。

誰もが当たり前に思っている生活、でも本当にそれってみんな同じなのだろうか。そうした疑問をもち、現実に触れて、自分にひきつけて考えていくことが大切です。いまの私たちの生活は、見守られ、支えられ、そしてそんな社会を支える人がいて成り立っています。社会の一員としてどんなことができるかを一緒に考えていきましょう。

人間生活学部　健康栄養学科
教　授　田村朝子
ASAKO TAMURA

生まれ育った新潟に戻って2年がたちました。最近は、毎週日曜日、磐越西線を走る「SLばんえつ物語号」に元気をもらっております。そのSL（貴婦人といいますが）、私の通った小学校に飾ってありました。止まった状態しか見たことがなかったので、現在の一生懸命走る姿を見ると私もがんばろう！という気持ちになります。

私の研究分野は「給食経営管理」です。小学校時代、給食を食べて大きくなりましたが、よもやそれに関連した研究をすることになろうとは思ってもみませんでした。学校給食は、私の前任地、山形で明治22年に始まったそうです。「食育」という言葉を最近よく耳にしますが、実は、明治のその頃既に給食を題材に「食育」は実践されていたという記録があります。給食も時代の変化と共に大きく変化していますが、「いただきます」「ごちそうさま」という変わらぬものも大切に、今後の研究活動を行っていきたいと思っております。

次号も引き続き本学教員を紹介いたします。

入試関連情報

オープンキャンパス2010夏 情報

日程　2010年 7月18日(日)　AMコース9:30～ PMコース13:30～
国際地域学科、子ども学科、健康栄養学科
7月19日(月・祝)　AMコース9:30～ PMコース13:30～
国際地域学科

内容　学科説明、入試制度説明、模擬授業、キャンパス見学、個別相談などで、色々な質問にお答えします。

事前申し込みが必要です。詳細は、**新潟県立大学入試課**(TEL025-270-1311)まで、お問い合わせください。

2009年 オープンキャンパスの様子

オープンキャンパス2010秋(開催予定)

日程:2010年9月20日(月・祝)

平成22年度(2010年度)入学者選抜試験　結果

学部	学科	入学定員	入試種別	募集人員	志願者数	受験者数	合格者総数	競争率	入学者
国際地域学部	国際地域学科	160	推薦	45	73	73	45	1.6	45
			一般A日程	50	629	609	146	4.2	48
			一般B日程	50	591	466	184	2.5	41
			一般C日程	15	460	334	40	8.4	34
人間生活学部	子ども学科	40	推薦	10	44	44	10	4.4	10
			一般A日程	5	170	170	26	6.5	1
			一般B日程	20	215	200	59	3.4	22
			一般C日程	5	154	124	8	15.5	7
	健康栄養学科	40	推薦	10	58	58	10	5.8	10
			一般A日程	5	74	69	14	4.9	12
			一般B日程	20	108	94	40	2.4	15
			一般C日程	5	106	86	5	17.2	4
合　計					2,682	2,327	587	4.0	249

平成23年度(2011年度)入学者選抜試験スケジュール

新潟県立大学 A日程	新潟県立大学 B日程	新潟県立大学 C日程	2011年(平成23)	他の国公立大学 前期日程	他の国公立大学 中・後期日程
大学入試センター試験1月15日(土)、16日(日)					
出願受付1/11(火)～21(金)	出願受付1/24(月)～2/3(木)		1月下旬	2次試験出願受付1/24(月)～2/2(水)	
試験日2/6(日)			2月上旬		
合格発表 2/16(水)			中旬		
入学手続 2/17(木)～23(水)	試験日2/20(日)	出願受付2/21(月)～3/2(水)	下旬	前期日程試験2/25(金)～	
	合格発表 3/2(水) 入学手続 3/3(木)～11(金)		3月上旬	合格発表3/1(火)～10(木)	中期日程試験3/8(火)以降
		試験日3/14(月)	中旬	入学手続締切3/15(火)	後期日程試験3/12(土)以降
		合格発表 3/20(日) 入学手続 3/22(火)～26(土)	下旬		合格発表 3/20(日)～23(水) 入学手続締切 3/27(日)

推薦入学試験　出願受付:11/1(月)～5(金)　試験日:11/13(土)　合格発表:11/24(水)　入学手続:12/1(水)～12/3(金)

編集後記

UNPニューズレター第３号を発行します。今回は米国ミネソタ州で行われた海外研修を特集しました。三週間半のホームステイと研修が学生達の貴重な経験となっていることが分かります。夏休みにはハワイとオーストラリアでの研修が予定されています。開学２年目を向かえる本学では、１２月に竣工予定の新棟の建築が急ピッチで進んでいます。この棟に新しいSALCが入ることで学生の語学学習意欲がさらに高まることが期待されています。

連絡先

新潟県立大学
〒950-8680
新潟市東区海老ケ瀬471番地
TEL:025-270-1300
FAX:025-270-5173
E-mail:unp@unii.ac.jp

新潟県立大学 東京サテライト
〒113-0024
東京都文京区西片1丁目17番8号 KSビル9階
TEL:03-5803-6955
FAX:03-5803-6971
E-mail:unptokyo@unii.ac.jp